

2018年9月15日

自然を語る会・読書会

『レイチェル・カーソン』19章 「狭き窓より」

担当：鈴木善次さん

参加者：9名

今日の読書会は、『レイチェル・カーソン』の19章だが、内容は『沈黙の春』の13章、「狭き窓から」の部分だった。

この章では、前半では生物学におけるマイクロ研究の一つ、細胞内のミトコンドリアで行われている生命のエネルギーの根源であるATPが作られる仕組みについて述べており、その仕組みが、人間がつくり出した化学物質により破壊されることを指摘している。さらに後半ではマイクロ研究分野の例として遺伝子研究を取り上げ、遺伝子が化学物質や放射線によってどのような影響を受けるかについても読者に示し、「二十億年余りにわたって原形質生物から進化し、淘汰されてきたこの遺産」を守る必要性を説いている。

しかし、今回読んだポール・ブルックスの「狭き窓より」では、その後半の遺伝子の部分は省略されている。担当の鈴木さんは、それは残念ということで、レジメの付録にはその後半部分の内容も紹介されていた。

本日はミトコンドリアでのエネルギー生産の部分でとても難しい箇所だったため、鈴木さんはレジメのほかに資料1から5までの詳細な資料を作ってくださいました。特に「理科教育のための科学史3 生物学のあゆみ」はとても分かりやすく書かれているので、理解を深めるのに役立った。

カーソンの生きていたころは薬物や放射線が遺伝子を傷つけるという話を中心だったが、最近の研究がどんどん進み、合成生物学なる分野が出てきているようだ。『合成生物学の衝撃』（須田桃子著 文藝春秋）という本の紹介があった。クローン羊などからまたさらに進んでいるようで、空恐ろしさを覚えた。

（文責 小川）

カーソンがジョージ・ウォルド博士の言葉を引用してタイトルを「狭き窓より」とした想いが鈴木さんの資料で腑に落ちました。カーソンの尊敬するウォルド博士が自分の視覚、網膜などの特殊な研究を、隙間から光が漏れる非常に「狭い窓」に例えたのだと。学位や周囲の華やかな研究成果にとらわれずに窓の間際で普遍的な真理を追究する博士への尊敬の念を込めてこの章のタイトルとしたのだと。昼光でわずか2、3ミリの瞳孔が広い視野や視角を生み出すように、特殊な狭い研究対象も追及すれば普遍的な真理が見えてくるのでしよう。科学は一つなのですから。

（文責 岩淵）